

幼児の生活におけるファンタジーの質的分析

C15DA001 伊藤 環（指導教員：磯部 錦司 教授）

1.研究の目的

子どもたちがつくり出すファンタジーは、どのように生み出され、どのように生活と関わっているのか。また保育の環境や援助、生活の中で関わるもの、過去の経験を、どのように結びつけ、ファンタジーを生み出しているのか。本研究では、ファンタジーが生まれるプロセスを検討する。

2.方法と手順

(1) 対象園

①K 保育園

独自のプロジェクト型保育を展開する園である。事例「雲」は、3年間続く活動である。対象児は、3～5歳児の事例に関わる子どもで、記録は、担任が記録した3年間のドキュメンテーションと、ドキュメンテーションの記録に関わる前後の活動や、園児の背景について担任にインタビューを行った。記録を時間軸において記述で整理し、場面分析及びプロセスの質的分析を行った。

②M 保育園

表現活動を主体とした一斉保育を行っている。事例「森の生き物」は、2日間の設定保育で、継続した活動である。対象児は5歳児で、記録は、プロセスすべてをビデオの映像及び、観察においてまとめた。活動終了後、記録を基に子どもの行動や状況を担任にインタビューを行った。プロセスにおいて質的分析を行い、子どもの活動や環境の状況を記録することで、さらなる分析を進めた。

(2) 場面の抽出・分析

ドキュメンテーションからファンタジーが表れてくる場面を抽出し、取り出した場面において、ファンタジーが可視化できる場面か

らファンタジーが生まれる要素を分類する。

(3) プロセスの質的分析

ファンタジーが生まれる場面において、ファンタジーが生まれるプロセスの質的分析を行う。どのようにファンタジーが生まれているか、ファンタジーと要素の関係について考察し、イメージの広がりや、イメージの具体化について検証していく。検証方法としてTEM（複線経路等至性モデル）を用いる。

3.結果と考察

(1) 場面分析：ファンタジーが生まれる要素

事例「雲」より抽出した場面から、ファンタジーの要因となる要素を「主体側の要素」「援助・環境に関わる要素」から捉えた。

主体側の要素として「期待」「物語」「見立て」「生活経験」「造形行為」「身体的行為」「音に関する行為」「共有」「共感」「五感」の10つの要素をまとめると、すべての場面に「生活経験」の要素がある。生活の中で経験したことが、言葉や表現において、子どもたちのイメージを広げるきっかけとなることがわかる。また、「見立て」や「物語」の言葉や造形行為、身体的行為の要素の表現内容から、イメージが広がり、ファンタジーが生まれる。中でも言葉によつての要素がより重要となり、「共有」「共感」といった要素が確認できる。

援助・環境に関わる要素では、「物的環境」「行為を促す言葉」「イメージを促す言葉」「人的環境」「共感」「共有」の6つの要素をまとめると、「物的環境」がすべての場面に見られ、「行為を促す言葉」、「イメージを促す言葉」も多くの場面で見られていることがわかる。子どもたちがイメージを広げるためには、自然環境や用意された設備、教材などの環境と

保育者による言葉掛けや援助が子どものイメージを広げるために重要な要素になると考えられる。また、言葉としての関わりが「主体側の要素」を生み出すきっかけとなり、子どもたちのイメージが可視化できるものとして表れてくることがわかる。

(2) プロセスの質的分析①事例「雲」

主体側の要素、援助環境と関わる要素は、ファンタジーが生み出されるプロセスの中で、「生活経験」からイメージが生まれ、「五感」を通してイメージが膨らみ、「見立て」や「物語」として自身のイメージを作り出し、言葉で表し、「造形行為」や「身体的行為」として色や形、身体的にイメージを表していく。そして「共感」「共有」「期待」をし、さらにイメージを広げていくと考えられる。そこには援助や環境も大きく関わり、ファンタジーが生まれるきっかけは、一つの要素だけでなく、多数の要素が重なり合ってイメージを広げていくことで、ファンタジーが生み出されている。

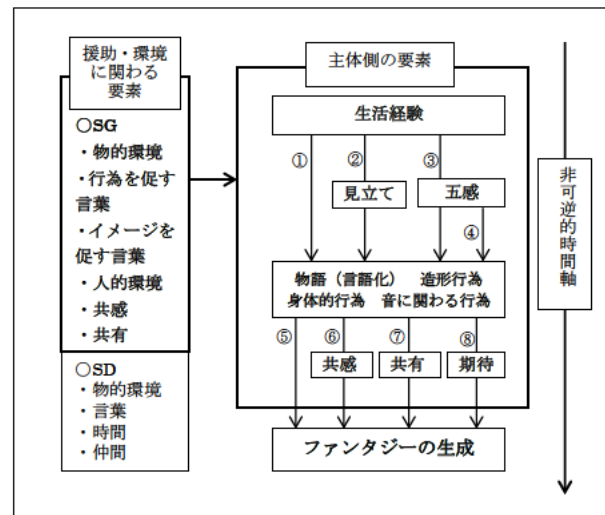
(3) プロセスの質的分析②事例「森の生き物」

事例「雲」と比較すると、事例「森の生き物」は、限られた時間の中での活動であり、活動は設定保育で、参加園児も興味関心にかかわらず全員の参加である。素材などの物的環境も、主な素材を和紙に限定したところが異なっている。しかし、事例の要素を見ると、主体側の要素も援助・環境に関わる要素も、表れた要素は同じである。また、主体側の要素との関わりを見ていくと、日常生活からイメージが生まれていることや、1日目の経験から新たなイメージが生まれていた。さらに、五感を通してイメージが膨らみ、物語として言葉でイメージを表し、造形行為としてイメージを形象化していった。そして共有をすることで、新たなイメージが生まれていった。

援助・環境に関わる要素においては、言葉

掛けによって行為やイメージが生まれ、子どもを見守るための援助として、共感や、イメージを共有する場を設けて、新たなイメージを生み出す助勢となった。物的環境においても、物と関わり、表したいものを見つけ、イメージを膨らまし、子どもが表現したいものを作り出すために素材を提供・提案することでそれぞれの表現が生まれた。これらのことから、場所や状況が違っても、ファンタジーが生まれるプロセスと要素の関係は2つの事例では共通し、多数の要素が重なり合っただけでファンタジーが生まれる。

上記より、ファンタジーが生成されるプロセスを図化すると、以下のような構造となる。



4. 総括と課題

ファンタジーが生まれる構造として、3層に分けた。第1層は、生活経験が基盤となり、第2層では、表現するために、イメージを形象化していく。第3層は、生活経験から生まれた行為が形象化され、意味を持ってファンタジーとして表される。生成されたファンタジーは、現実の世界とファンタジーの世界を行き来している。

今後、子どもを近くで観察し、ファンタジーが生まれる要素や、援助・環境についてプロセスを追って見ていきたい。また子どもたちのファンタジーの構造について、よりの確な検討をしていきたい。